

学 位 請 求 論 文 要 旨

勧誘・依頼に対する断り言語行動の日中対照研究
—社会人と学生の日常生活会話を中心に

平成 30 年 1 月

城西国際大学大学院 人文科学研究科

比較文化専攻

王 书睿

論文の要旨

本研究は、語用論のポライトネス理論に基づき、日中両言語における勧誘・依頼に対する断り言語行動を考察するために、日中両国の母語話者である大学生と社会人を対象に、ロールプレイによる調査を行った。調査は、日中両国の母語話者である社会人の勧誘に対する断り言語行動、日中両国の母語話者である大学生の勧誘に対する断り言語行動、日中両国の母語話者である社会人の依頼に対する断り言語行動、日中両国の母語話者である大学生の依頼に対する断り言語行動という四つの調査からなっている。さらに、文化的属性による異同のみならず、社会的属性による異同も考察した。序章では、本研究の背景を概観した上で、研究の目的、意義及び内容構成を明確にした。

第2章では、まず、従来の断り言語行動に関する研究で応用される語用論を概観した上で、語用論における Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論を本研究の理論的枠組みとした。次に、日本における研究、中国における研究、断りの言語行動に最も多く見られた「理由」を中心にする研究という3つのアプローチから、断り言語行動に関する実証的先行研究を概観した。そして、今までの先行研究のほとんどは、まだ社会に出ていない学生を対象にする DCT やロールプレイによる調査を採用したので、断り言語行動の単純化、静的研究の傾向に陥りやすい問題が明らかになった上で、本研究において、日中の母語話者である社会人、学生をそれぞれ対象に、異文化の間のみならず、社会人と学生の比較を行い、聞き手と話し手の間の1ターントーキングのみならず、数回の発話からなっている会話のプロセスを全体的に、動的に捉えようとする研究立場を明確にした。そして、フォローアップ・インタビューにより、断り手の心理的過程も探った。

第3章では、断り言語行動の調査で採用されるデータ収集方法の長所、短所をそれぞれ比較した上で、本研究の立場に基づき、ロールプレイによる調査方法を採用した。次に、予備調査1の結果に基づき、調査の場面を設定した。また、予備調査2の結果により、場面の設定で見られた問題を修正した。なお、収集したデータをより客観的に分析するために、文字起こしとコーディングの手順を述べた。最後の分析方法において、会話の構造、意味公式の分類、意味公式とストラテジー及び相手のフェイスを脅かす度合い (FT 度) の大きさの関係を述べた。

第4章では、調査1——日中の母語話者である社会人を対象に、勧誘に対する断り言語行動に関する調査の考察と結果を述べた。

まず、会話の構造により、断りの会話を「勧誘話段」、「勧誘・断りの交渉話段」(「1回目の断り」、「2回目の断り」、「3回目の断り」などからなっている)、「終了部」という3つの話段に分けた。さらに、各話段における意味公式の使用数と平均値によって各話段における意味公式の使用特徴を対照した。そして、各話段における意味公式のカテゴリーと意味公式の展開パターンの日中対照を合わせて、日中の断り言語行動における会話の全体的な構造の対照も可能であった。会話の構造というアプローチから分析すると、日中の両言語母語話者の断り言語行動においては、ほぼ同じ会話の構造が見られたという結論が得られたが、意味

公式の使用数及び平均値からすれば、JJ1 のほうでは {あいづち} を始め、{驚き}、{困惑} などを含む「付随表現」と、「間接的断り」に分類される {詫び} が顕著に多用されたのに対して、CC1 のほうでは {不可} を含む「直接的断り」がより多く使用されたという相違点もわかった。

次に、意味公式の量的分析により、全体的に各意味公式の使用数及び割合、人による各意味公式の使用平均値の有意差、親・疎関係と力関係を含む社会的関係による各意味公式の有意差を考察した。考察の結果で、JJ1 と CC1 の断り言語行動の相違点が観察された。

最後に、JJ1 と CC1 のいずれにおいても多く見られた {不可}、{理由} の内容分析と、{あいづち}、{詫び} の表現形式分析を行った。{不可}、{理由} の内容を分析する際に、相手のフェイスを脅かす度合い (FT) の大きさに基づき、{不可}、{理由} の内容をさらに細分した上で、JJ1 と CC1 の断り言語行動に見られた {不可}、{理由} の各内容の使用数、さらに社会的関係が各内容に与えた影響を考察した。{不可}、{理由} の内容分析によると、JJ1 より CC1 のほうではストレートな会話のスタイルが好まれたことが観察された。{あいづち} を分析するに先立って、機能に基づき {あいづち} を分類した。さらに、JJ1 と CC1 に見られた機能による {あいづち} の各表現形式の使用数、社会的関係が {あいづち} の各表現形式に及ぼした影響を考察した。また、言葉の改まった程度によって、{詫び} を分類した上で、JJ1 と CC1 の {詫び} の表現形式も対照した。

第5章においても、第4章と同じ分析方法で、調査2——日中の母語話者である社会人を対象に、依頼に対する断り言語行動を考察した。

まず、会話構造の分析により、社会人の JJ2 と CC2 のいずれも、65%以上の会話場面で、「依頼話段」、「依頼・断りの交渉話段」、「終了部」の3つの話段からなっている会話構造が見られた。さらに、各話段において中心に使用された意味公式のカテゴリー、意味公式もほぼ同一であった。

次に、意味公式の量的分析により、JJ2 のほうでは {詫び}、{あいづち}、{ためらい}、{不可}、{原則的陳述} が多く見られたのに対して、CC2 のほうでは {理由}、{情報確認・要求}、{条件提示} が多かったという相違点がわかった。さらに、人による意味公式の使用平均値の有意差によると、{詫び}、{あいづち}、{ためらい}、{原則的陳述} における JJ2 と CC2 の間の有意差が検証された。また、社会的関係による JJ2 と CC2 の意味公式の有意差の考察によると、力関係が JJ2 の {理由}、{詫び} に及ぼした影響が最も著しかった。

最後に、{不可}、{理由} の内容分析と {あいづち}、{詫び} の表現形式の分析を行った。そのうち、{不可} の内容分析によると、CC2 より JJ2 のほうでは相手のフェイスを脅かす度合い (FT 度) が大きく、ストレートな「意志・本音」を表す {不可} が多く見られた。ゆえに、社会人を対象に、勧誘に対する断り言語行動においては、CC1 のほうで直接的で、相手の FT 度が大きい「本音」、「意志」の {不可} または「気持の表明」を表す {理由} が好まれたのに対して、社会人を対象に、依頼に対する断り言語行動においては、相手の FT 度が大きく、ストレートな「意志」を表す {不可} が多用されたという場面と文化によって、断り言

語行動に見られた異なる特徴が観察された。つづいて、JJ2 と CC2 の {あいづち}、{詫び} の表現形式の分類、さらに社会的関係がその表現形式に与えた影響も考察した。

第6章では、第4章と対照的に、調査3——日中の母語話者である大学生を対象に、勧誘に対する断り言語行動に関する調査を行った。その分析方法は、第4章と同様であるが、大学生の勧誘に対する断り言語行動における意味公式の数も、種類も社会人より少なかったため、大学生の JJ3 と CC3 の間に見られた相違点が社会人ほど顕著でなかった。ゆえに、JJ3 と CC3 の勧誘に対する断り言語行動に見られた会話構造がより似ていることが伺えた。

次に、意味公式の量的分析により、全体的に各意味公式の使用数及び割合、人による各意味公式の使用平均値の有意差、親・疎関係と力関係を含む社会的関係による各意味公式の有意差を考察した。

最後に、第4章と同様に、{不可}、{理由} の内容分析と {あいづち}、{詫び} の表現形式の分析を行った。{不可}、{理由} の内容分析によると、社会人と同様に、JJ3 より CC3 のほうでは相手のフェイスを脅かす度合い (FT 度) が大きい「本音」を表す {不可} と、「気持の表明」を表す {理由} が、顕著に多く見られた。そして、「本音」と「気持の表明」が主に親しい人に対する断り言語行動で多く見られた。つづいては、JJ3 の {あいづち} の表現形式の分析によると、社会人と同様に、「聞いている」という役割を果たしている {あいづち} が最も多用された。そのうち、親・疎関係より上・同関係による {あいづち} の差が顕著に見られた。なお、JJ3 と CC3 の {詫び} の表現形式を分類した上で、考察を行った。

第7章では、第5章と対照的に、調査4——日中の母語話者である大学生を対象に、依頼に対する断り言語行動を考察した。まず、JJ4 の「終了部」を除き、JJ4 と CC4 のいずれも、50%以上の会話場面においては、「依頼話段」、「依頼・断りの交渉話段」、「終了部」の3つの話段からなっていることが明らかになった上で、JJ4 と CC4 の依頼に対する断り言語行動における会話構造もほぼ同じであった。次に、全体的に意味公式の量的分析、人による意味公式の使用平均値の有意差、社会的関係による各意味公式の使用平均値の有意差を考察した。最後に、JJ4 と CC4 共に多く見られた {不可}、{理由} の内容分析と、JJ4 で最も多用された {あいづち} の表現形式の分析を行った。

第8章では、社会的属性による断り言語行動における異同を考察した。勧誘を断る場面における社会人と学生 (JJ1 と JJ3、CC1 と CC3)、依頼を断る場面における社会人と学生 (JJ2 と JJ4、CC2 と CC4) をそれぞれ比較した。まず、断り会話の構造分析によると、断り会話の構造がほぼ同様であった。次に、意味公式の量的分析によると、日本語母語話者の社会人と学生との差が大きかった。しかし、意味公式の内容分析によると、中国語母語話者の社会人と学生との差が顕著であった。

終章では、文化的属性と社会的属性による断り言語行動における異同をそれぞれまとめた。さらに、本研究の発見を述べた。なお、本研究で残された問題を明確にした上で、今後の研究課題も論じた。